2022年12月11日 礼拝メッセージ

聖書：出エジプト記6章2～8節
説教：わたしは主である

はじめに

イエス・キリストの御降誕を待ち望むアドベントの三週目に入りました。二千年前に救い主が私たちのところに来られたのは、神が突然に思いついたことではなく、旧約の時代、アブラハム、モーセ、ダビデを通して約束してくださった契約にもとづいております。それで前回は、アブラハムに語ってくださった契約を見ました。きょうは二回目ということで、モーセに語ってくださった契約について見てまいります。

１　モーセ

１）エジプトの苦難

イスラエルの人々がエジプトに移り住むようになったのは、ヤコブの時代にイスラエルに大きな飢饉が起きたことがきっかけで、それから四百年の間、彼らはなんとかエジプトの社会で生き延びようとしてきました。ところが今も移民のことは難しい課題となっているように、彼らも同じ問題に直面します。少数のうちは目立たないのですが、人の数が増えていくに従って自然にエジプト社会に大きな影響力を持つようになる。そこで摩擦が起きる。また宗教的な問題もありました。エジプトには独自の宗教があり、いろいろな神々を拝んでいました。ところがイスラエルの民は天と地を創造された唯一の神だけを信じて礼拝し、そこは絶対に交わろうとしません。この二つの要素が重なって、移民に対するさまざまないやがせが始まり、イスラエル人を安い労働力として酷使し、差別していきます。とうとう人々がそのことに耐えきれなくなって神に助けを求めて叫ぶと、神はその声を聞き、モーセを呼び出し、エジプトにあなたを遣わすという計画を明らかにします。それでモーセはエジプトに遣わされていった。それが今日の箇所の背景です。

２）救いが遠のくように見えるとき

エジプトにモーセが向かうと、イスラエルの民は、明るい未来が開けたように感じて大喜びしました。ところが、実際はどうなったか。ファラオは心を頑なにして、ますますイスラエルに対して過酷な労働を強いていく。逆方向に動いてしまう。これでは期待が大きかっただけに、失望も大きい。人々はモーセとアロンに詰め寄り、怒りをぶちまけていくのです。

モーセもこれには困ってしまいます。イスラエルを救うためにということで、神から言われたことをそのまま語ってきました。当然神はすぐに救ってくださると思っていたのに、なぜか神は救おうとされないのです。

これと似たような事は皆さんも経験があるでしょう。神に熱心に助けを求めて祈ったのに、問題はますます悪くなるばかりです。祈り方が足りなかったのか。それとも神は私を嫌っているのか。あるいはさまざまな過去の罪のことが思い出されて、神はあの罪のことは赦しておられない、それで罰としてこんなことになっているのではないか。様々な不安が襲ってくる。ときには信仰を捨てたくなるようなことさえあります。

なぜ神の救いは遅れるように見えるのか。私もはっきりとした理由はわかりません。それでも一つだけは言える。詩篇119篇71節です。「苦しみにあったことは 私にとって幸せでした。それにより私はあなたのおきてを学びました。」

苦しみはあって欲しくないこと。そう思います。でもそれでも苦しみにあったなら、私たちはそこから何か大切なことを学ぶことになるのかもしれません。今日のところを見ていきます。

２　契約

１）神の名：わたしは主である

今日のところで三度繰り返されていることばがあります。いつも言いますが、聖書の短い箇所のなかで同じ言葉が繰り返されているのには何か意味があると考えるべきです。ここでは「わたしは主である」がそれにあたる。なぜ繰り返すのか。3節に理由が述べられています。「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主という名では、彼らにわたしを知らせなかった。」

この名前のことについてですが、モーセがミディアンの地で神に呼び出されたときのことです。「あなたの名前を教えてください」と尋ねると神はこう応えます。「わたしは『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエルの子らに、こう言わなければならない。『わたしはある』という方が私をあなたがたのところに遣わされた、と。」」（3章14節）

神はモーセに初めてご自分の名前を明らかにされました。それがなんとも不思議なことですが、「主」と発音されることばがそのまま「わたしはある」意味です。なぜ名前を教えたのでしょう。自己紹介というような軽い意味ではありません。昔の日本では、自分の本当の名前をほかの人には教えないということがあったそうです。というのは、名前が自分のいのちそのものという考え方があって、もし敵に自分の本名を知られてしまうと、呪い殺されることを恐れた。ですから、名前を知っているのは親と結婚相手だけだった。聖書もそれに通ずるところがあって、例えばアブラムという名前が途中からアブラハムに変えられたのもそうです。名前が変わるほど彼の人生が大きく方向転換したことを表します。

それが名前の持つ重みです。そうすると神が名前を教えてくださったことがいかに大事件であったのかおわかりでしょう。神はモーセを全面的に信頼して、ご自分のいのちを明らかにしてくださった。それくらいのことだったのです。

２）アブラハムとの契約

こうして名前のことを確認してから4節を語ります。「 わたしはまた、カナンの地、彼らがとどまった寄留の地を彼らに与えるという契約を彼らと立てた。」

彼らとはアブラハム、イサク、ヤコブのことで、モーセにしてみればアブラハムはおよそ500年前の遠い先祖にあたります。たとえればこんなことです。ある人が自宅を突然訪ねてきて、毛筆で書かれた古めかしい書類を突きつけてその人がこう言うのです。「これは、戦国時代に私の先祖があなたの先祖と交わした契約書です。ここには、あなたが今住んでいる土地は実は私の土地であるという内容のことが書かれている。」そんなことを言われたらどうしますか。たぶん誰も相手にしないでしょう。なぜなら戦国時代と国の制度も法律も違うからです。

ところが、聖書ではこれが堂々とまかりとおる。なぜか。前回も触れたことですが、契約書を交わすときに、その契約を有効であるとお墨付きを与えるのは誰なのか。日本であれば国が後ろ盾になりますが、国の制度が変わってしまえばその時点で契約は無効になります。ところが聖書の場合は契約の後ろ盾になるのは神です。神は永遠に変わりません。なので五百年であろうが何千年であろうが関係ない。この契約は永遠に有効なのです。

３）思い起こす

そこは納得したとしても、一つの疑問が残る。4節の最後です。「わたしの契約を思い起こした。」神は契約をすっかり忘れていたということでしょうか。忘れていたけれどイスラエルの嘆き声を聞いて、はっと思い出したのか。人間ならよくありそうなことですが、もしそうならなんだか頼りなくて、とても信頼できません。もちろんそんなはずはなくて、神は契約のことをきちんと覚えています。

これも具体的に考えるとよい。たとえば働いている人は年末調整や確定申告をしなければなりません。複数の収入があるひとは全部申告しなければならず、隠すことはできない。また税金の計算も自分勝手にはできません。全部法律に則って行います。わずらわしいように思いますが、法律がなかったなら社会は大混乱していたでしょう。このように法律は私たちを守るためにあります。

神も同じです。どんな大昔に取り交わされた契約であろうとも、いったん「こと」を起こすときは、思いつきではしない。必ず契約に則って行う。イスラエルの民が苦しんでいるとき、神は何を根拠にして行動するか。アブラハムと交わした契約。変な言い方かも知れませんが、契約がある以上、神はその契約にずっと縛られている。そのことを言おうとしている。

３　贖い

１）伸ばされた腕

名前も根拠もわかった。では神は具体的にどのようにして救おうとされるのでしょう。6節。「わたしは主である。わたしはあなたがたをエジプトの苦役から導き出す。あなたがたを重い労働から救い出し、伸ばされた腕と大いなるさばきによって贖う。」

二つあります。まず一つ目は伸ばされた腕。どんなことかと考えてもよくわからないので、こんな時は反対のことを見るとよい。イザヤ書59章1，2節です。「見よ。主の手が短くて救えないのではない。 その耳が遠くて聞こえないのではない。むしろ、あなたがたの咎が、 あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、 あなたがたの罪が御顔を隠させ、 聞いてくださらないようにしたのだ。」

神が私たちを救うと言うとき、ある一つの壁を越えなければならない。なにか。「あなたがたの咎、あなたがたの罪」です。神の御腕は罪を乗り越

えて救いをもたらす。それが伸ばされた腕ということになります。

２）大いなるさばきによって

二つ目は、大いなるさばき。これは簡単。モーセは頑ななファラオに対して十のわざわいをもたらし、それで最後にエジプトから逃れることができた。大いなるさばきとは、あのわざわいのことだ。もちろんそのとおりです。しかしそれだけなのでしょうか。6節の最後に「贖う」とあります。最近はあまり使わなくなりましたが、お金を払って買い戻すという意味です。罪の奴隷となっていた私たちに神が御手を伸ばし、代価を払って罪から買い戻してくださった。それが救いです。いったいどんなふうにして代価を払ったのか。

神のひとり子が私たちのところに来てくださいました。この方が十字架で身代わりとなって罪のさばきを受けられました。そうすると「伸ばされた腕」とはどんな意味になるでしょう。神が罪の世に降りてこられたことではないですか。「大いなるさばき」とはなんでしょう。主が十字架で受けられたさばきではないですか。そうやって私たちを贖いだしてくださいました。

いったいどこに連れて行くためにでしょう。8節。「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓ったその地にあなたがたを連れて行き、そこをあなたがたの所有地として与える。わたしは主である。」

神がアブラハムと交わしてくださった約束、私たちを神の国に連れて行くという約束。この方が十字架でさばきを受けられたのを見たとき、この約束は確かに果たされていると私たちは信じて、歩んでまいります。